

# 法学系の学生を対象にした 英語学習に対するニーズ調査

カレイラ松崎順子

## 要 約

本研究では法学系の学生の英語学習に対するニーズ分析を行い、彼らが大学の英語の授業に対してどのような態度や願望を持って英語を学習しているのかを調査し、さらに、英語教員および法学系の教員にも自由記述式の質問紙調査を行った。その結果、多くの学生は日本語での説明を望んでおり、ビデオやDVDなどを使用した学習方法を好み、さらに、英米の映画を使った授業を受けたいと思っている学生が多いことが明らかになった。また、文法に関しては学生および教員ともに学び直したい、学ぶべきだと思っており、一致した意見が見られたが、コミュニケーションを重視した楽しい授業を受けたいと思っている学生が多い一方で、教員にはそのような意見はあまり見られなかった。さらに、専門分野を英語で学びたいという学生が多かった経済、医療、理工系などの学部とは異なり、法律関係のことを英語で学びたいという学生はかなり少なく、英語および法学系の教員ともに英語で法学などの専門を学ぶことに関して消極的な意見が多かった。

## 1. はじめに

ニーズ分析とはシラバスやカリキュラムを開発する際に言語のニーズについての情報を体系的に集めることであり (Brown, 1994; Richards, 2001)、ニーズ分析には①ディスコース・コミュニティのニーズ、②教員・大学のニーズ、③学習者のニーズの3つの領域があるといわれている (深山, 2000)。ディスコース・コミュニティとは「専門家集団と訳され、この集団内で英語が使用される場合、例えば弁護士同士や医者同士のコミュニケーションと、この集団と外の者として英語が使用される場合、例えば医者と患者のコミュニケーションがあげられる」(寺内, 2005, p.21)。①ディスコース・コミュニティのニーズおよび②教員・大学のニーズは、学習者が目標言語を使う状況を特定し、それに基づいてニーズ分析を行う目標状況分析であり、専門分野の教員や卒業生対象のアンケートなどからコースの学習目標を設定する (深山, 2000)。一方、③の学習者のニーズは、現状分析であり、学習

法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

者の学習スタイルや英語に対する態度などを問う質問紙を実施し、学習者に適切な指導法や学習スタイルなどを決定するのに参考にする（深山，2000）。

本研究では③の学習者のニーズとして法学系の学生の英語学習に対するニーズ分析を行い、彼らが大学の英語の授業に対してどのような態度や願望を持って英語を学習しているのかを調査し、さらに、②である教員・大学のニーズとして彼らの英語を担当していた英語教員および彼らが所属する法学系の学部の教員に自由記述式の質問紙調査を行い、英語の熟達度の低い学生が多い法学系の学部においてどのような英語の授業を行っていくべきかを検討していく。

## 2. ニーズ分析

言語教育におけるニーズ分析の研究は1960年代から1970年代にかけて始まったとされ（Richards, 2001）、言語教育の分野において様々なニーズ分析が行われてきた。早坂（1995）は身につけたい英語の能力、英語を学ぶ理由についてのニーズ分析を日本の大学1・2年生に対して行い、多くの学生が海外において様々な日常的状況に対処できるような英語の能力を身につけ、英語で自分自身の考えや感情について話せるようになりたいと思っていることを報告している。中野（2005）は工学部の学生の英語学習に対するニーズ分析を行い、8割近くの学生が専門英語を必要であると思っており、さらに、話す力を最も伸ばしたいと思っている学生が多かったと報告している。吉重（2005）は工学部、水産学部、医学部の大学1・2年生を対象にニーズ分析を行い、どの学部の学生も英語の「話す」「聞く」力が必要であると感じており、さらに、専門教育を受ける上で英語が必要であると認め、英語の専門用語の学習を望んでいたことを報告している。また、鈴木（2007）は助産師を目指す学生に対して英語学習のニーズ調査を行った結果、「産科分野」の英語をより多く導入すると同時に、英語に苦手意識を持つ学生のために英語を「楽しめる」工夫を行い、彼らが達成感を持てるような講義内容を組む必要性があると指摘している。カレイラ（2009）は保育士養成課程の学生を対象にニーズ分析を行い、多くの学生が海外に行ったときに困らない英語力を身につけたいと思っており、また、映画やテレビ番組などを使った授業や読解やリスニングのコツを教えてくれる授業を受講したいと思っていることを明らかにしている。さらに、クラスター分析により「消極的」群と「積極的」群の2つのグループに分けた結果、受講したいと思う英語の授業において2つのグループにかなりの差がみられたと報告している。また、加茂・藤原（2013）も保育士養成課程の学生に対して英語学習に関するニーズ調査を行った結果、保育士養成課程の学生の学習スタイルと好みは、高校まで受けてきた英語の授業の影響から伝統的な英語の授業の形態を好み、さらに、授業は楽しく、負担が少ないものを好む傾向があると指摘している。また、カレイラ（2016）では社会科学系の大学生の英語学習に対

するニーズをテキストマイニングの手法を取り入れて調べた結果、社会に出たときに役立つ、特に、英語のコミュニケーション能力を高める授業を受けたいと思っている学生が多く、さらに、英語の熟達度が低いグループでは漠然と必要であると思うから英語を学習する傾向がみられたが、熟達度が高くなるにつれて就職ということ意識して英語を学習するようになることを明らかにしている。

その他、いくつかの研究では学生や教員、さらに卒業生などに対してニーズ調査を行い、それらの結果を比較している。たとえば、Kikuchi (2005) は学生および教員を対象にニーズ調査を行った結果、学生は英文和訳が最も効果的な学習方法であると思っているが、教員はあまり効果的であるとは考えていないなど、学生と教員との間に英語学習に対する認識に違いがあることを指摘している。また、カレイラ (2015) は社会科学系の学部所属する学生、彼らに英語を教えている教員、および卒業生を対象に英語学習に対するニーズ分析を行った結果、学生・教員のほとんどが文法力を高めたい、高める必要があり、英文法を学び直す授業が必要であると思っている一方で、卒業生は職場において文法力はあまり必要がないと感じており、さらに、海外の学生との交流やTOEICに関する試験対策においても、学生・教員と卒業生の間において相違点が見られたことを報告している。さらに、永野 (2007) はコメディカル（看護師、理学療法士、作業療法士など医療現場において医師と協同で働く専門職員）養成過程の学生および各過程の専門教員に質問紙調査を実施した結果、学生は外国人患者とコミュニケーションを行うための英語力を習得したいと望んでいるのに対し、参加した教員は英語の文献を読むための読解力を要求しており、両者間の英語学習に対するニーズにずれが見られたことを報告している。

### 3. 本研究の目的

上述したように今まで様々な学部の英語学習に対するニーズ分析が行われてきたが、法学系の学生に対する調査としては、Mori & Tanabe (2011) が英語の授業に対する授業評価の分析を行っているが、質問紙調査によるニーズ分析を行った研究は著者が知る限り日本ではまだ行われていない。経済学部や工学部、さらに、医療系の学部などでは専門に関することを英語で学びたいという学生が多く見られたが（カレイラ, 2016；永野, 2007；中野, 2005；吉重, 2005）、法律のような特殊な専門用語が多い学問分野においても果たして同様に法律関係のことを英語で学びたいという学生が多く見られるのであろうか。特に、英語の熟達度の低い学生が多い法学系の学部では英語で法律を学ぶのはかなり無理があると思われる。では、彼らにはどのような英語教育が必要なのであろうか。この問いに答えるために、本研究では法学系の学生、担当する英語教員、および所属する法学系の教員に調査を行うことにした。上記にもとづいて以下の3つのリサーチ・クエスチョンを設定した。

法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

1. 法学系の学生はどのような英語学習のスタイルや好みを持っているだろうか。
2. 法学系の学生はどのような英語の能力を身につけたいと思っているだろうか。
3. 法学系の学生はどのような英語の授業を受講したいと思っているだろうか。また、それらは英語教員や法学系の教員の意見とどのような類似点・相違点があるであろうか。

#### 4. 本研究の手続き

##### 4.1 調査協力者

調査協力者は、東京都内の私立大学に属する法学関係の学部属する1年生148名である。彼らのTOEICの平均点は297.84であった。

##### 4.2 質問紙

調査は2012年7月上旬から下旬に行った。使用した質問紙は「英語学習に対するスタイルと好み」、「卒業までに身に付けたい英語能力」、および「受講したい英語の授業」である。「英語学習に対するスタイルと好み」はKikuchi (2005) およびカレイラ (2009) を参考にし、各質問項目が対象となる調査協力者の実態を反映しているかどうかに留意しながら、計17項目を作成した(付録1を参照)。「卒業までに身に付けたい英語能力」は清水・小山田 (2001) を参考に計11項目を作成した(付録2を参照)。「受講したい英語の授業」(付録3を参照)はカレイラ (2009) を参考に計23項目を作成した。なお、それぞれの項目について「あてはまる」(4点)、「まあまああてはまる」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「あてはまらない」(1点)の4件法を採用し、判断を求めた。4件法を採用したのは、件数を奇数(5件法など)にすると、あまり考えずに真ん中のカテゴリー「どちらでもない」「中ぐらい」を選ぶ回答者がいると思われるためである(Dörnyei, 2003)。

さらに、本研究では「どのような英語の授業を受けたいか」について問う自由記述式の項目も設けた。自由記述式の回答は表現に自由度があるために、量的なデータよりも豊かなデータを得ることができ、生き生きとした例や説明が自分の言葉で語られ、予測していなかった問題を見いだすことができる(Dörnyei, 2003)。ゆえに、本研究では自由記述式の項目を設けて、多肢選択式からだけでは見いだすことができない学習者のニーズを探り出すことにした。なお、本調査はテストではなく、成績には一切関係がないことなどが記載されている同意書を得たうえで調査を行った。

さらに、英語の授業に対するニーズに関して学生と教員との間にどのような類似点や相違点があるかを明らかにするために、彼らに英語を教授していた英語教員(3名)と彼らが所属していた学部の教員(8名)にどのような英語教育を行うべきかの自由記述式の質問紙調査も行った。

### 4.3 データ分析

上記の質問紙の各項目に対して法学系の学生がどのような考えを持っているのかをより明確にするため、4段階尺度形式を「あてはまる」「あてはまらない」の2段階に変換し、再集計した上で $\chi^2$ 検定を行った。これらの分析にはIBM SPSS Statisticsを使用した。

## 5. 結果

### 5.1 法学系の学生の英語学習に対する態度や要望

最初に上記の研究・クエスチョン「1. 法学系の学生はどのような英語学習のスタイルや好みを持っているだろうか」、「2. どのような英語の能力を身につけたいと思っているだろうか」、および「3. どのような英語の授業を受講したいと思っているだろうか」について $\chi^2$ 検定により検証した。

「英語学習に対するスタイルと好み」（表1を参照）において、5%水準で有意に「あてはまる」と回答した人数に有意な偏りが見られた項目は、項目2、項目4、項目6、項目7、項目10、項目11、項目12、項目16、および項目17であった。一方、5%水準で有意に「あてはまらない」と回答した人数に有意な偏りが見られた項目は、項目3および項目15であ

表1 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の各項目の $\chi^2$ 検定結果

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまる	あてはまらない	
1	76	72	0.11
2	106	40	29.84**
3	33	114	44.63**
4	102	44	23.04**
5	65	81	1.75
6	134	13	219.42**
7	127	21	75.92**
8	80	68	0.97
9	72	76	0.11
10	117	31	49.97**
11	124	24	67.57**
12	101	45	21.48**
13	74	73	0.01
14	59	88	5.72
15	44	102	23.04**
16	120	27	58.84**
17	137	13	99.60**

\*\* $p < .01$

法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

表2 「卒業までに身につけたい英語力」の各項目の $\chi^2$ 検定結果

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまる	あてはまらない	
18	140	7	120.33**
19	139	7	119.34**
20	137	10	109.72**
21	131	16	89.97**
22	126	21	75.00**
23	127	20	77.88**
24	142	5	127.68**
25	126	20	76.96**
26	125	20	76.03**

\*\* $p < .01$

表3 「受講したい英語の授業」の各項目の $\chi^2$ 検定結果

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまる	あてはまらない	
27	74	71	0.06
28	79	66	1.17
29	64	80	1.78
30	68	77	0.56
31	97	48	16.56**
32	81	62	2.52
33	59	86	5.03*
34	56	89	7.51**
35	46	96	15.23**
36	117	28	54.63**
37	133	12	100.97**
38	126	19	78.96**
39	94	48	14.90**
40	70	75	0.17
41	79	66	1.17
42	76	69	0.34
43	70	74	0.11
44	71	73	0.03
45	64	81	1.99

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

った。

「卒業までに身につけた英語力」(表2を参照)において、5%水準で有意に「あてはまる」と回答した人数に有意な偏りが見られた項目は、項目18、項目19、項目20、項目21、項目22、項目23、項目24、項目25、および項目26であった。

「受講したい英語の授業」(表3を参照)において、5%水準で有意に「あてはまる」と回答した人数に有意な偏りが見られた項目は、項目31、項目36、項目37、項目38、および項目39であった。一方、5%水準で有意に「あてはまらない」と回答した人数に有意な偏りが見られた項目は、項目33、項目34、および項目35であった。

## 5.2 法学系の学生が受けたい英語の授業に関する自由記述式の回答

以下は、法学系の学生が受けたい英語の授業に関する自由記述式の回答の例である。

コミュニケーションなどに関係する授業 (11名)

- ネイティブスピーカーのようにペラペラに日常会話ができるような授業が受けたい。
- コミュニケーションに重点を置いた教育。
- 難しい文章のReadingばかりではなく、少し簡単でもいいからSpeakingやWritingに重点を置いた教育。
- スピーチの場が多い様なところ。
- 外国人とある程度会話ができるようにしたい。
- 外国人と交流したい。
- 日常会話スキルがアップする勉強。
- 外国人の会話内容がわかるようになる授業。
- コミュニケーションが多い授業。
- 英語だけで会話できるようになりたい。

楽しい授業 (6名)

- 楽しく厳しい英語教育がいいです。
- 楽しい授業。
- 英語に対して苦手意識をもたず、英語が楽しくなるような。
- 楽しく英語が身につく授業。
- ゲーム感覚で出来る授業。
- わくわくするような英語教育。

映画やドラマに関する授業 (3名)

- 海外の映画やドラマを教材にした授業が受けてみたいです。

法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

- 映画を使った授業。
- 映画を使った授業。

英文法に関する授業（2名）

- 英文法をもっと向上させたい。
- 文法をもういちど復習して身に付ける授業。

レベルにあった授業

- 自分のレベルにあった授業。
- 英語がすごく苦手なのでついていけるくらいのスピードで授業をしてほしいのと、難しすぎるとさらに混乱してしまうので少し簡単な問題を少しずつやりたい。

TOEIC に関する授業

- 自然と TOEIC の点数が上がるような英語教育。
- TOEIC の点をあげる。

その他の意見

- 将来に役に立つような授業。
- パソコンだけでなくホワイトボードに書いて授業をしてほしい。
- 読む練習などを増やしてほしい。
- 実践的な英語教育を受けたい。
- 文法偏重主義的ではない教育。

これらのことから本研究に参加した学生は英語でコミュニケーションができ、さらに、楽しく、特に映画などを使った授業を望んでいるといえるであろう。一方で、少数ながら自分のレベルにあったクラスで英文法を学び直し、また、TOEIC の点数があがるような授業を受けたいと思っている学生もいることがわかる。

### 5.3 担当する英語教員の自由記述式の回答

以下は法学系の学生にどのような英語教育を行うべきかに関する英語教員の自由記述式の回答である。

- 中学生レベルの文法から教えるべきである（量をとにかく増やす）。また、お金をかけてでも外国人（ネイティブ・ノンネイティブ）を雇って、英語で接する機会を増やしてあげるべきである。

- 上級クラスの学生には専攻分野に関する英語や、英字新聞、インターネット、映像などを用いた英語学習を行うことは良いと思いますが、中級クラス、下級クラスの学生には基本的な英文法から学習しなおす必要があると思います。
- 将来、英語を使って働く機会があった場合に自らすすんで訓練を受けるようなモチベーションや自信が持てるよう、基礎力とともにコミュニケーション力を付ける方針が適当なのではと思います。

以上のことから英語教員は英文法を学習し直すことやコミュニケーション力をつけることが必要であると感じていることがわかる。

#### 5.4 法学系の教員の自由記述式の回答

以下は本研究に参加した学生が所属する法学系の教員の英語教育に関する自由記述式の回答である。

- 全体としては、海外で異文化に接する機会を持つための英語教育があればよいと思う。特に勉強したい人に機会を設けておく。
- 高校時代の英語を学び直すところから始める必要があると思います。簡単な英語の発音が間違っていることも結構多いです。
- 法律関係の英語は、時間的にも1年次の「英語授業」に盛り込むのは難しいかもしれませんが。国際的にみて、一部の分野を除き、法律は極めて方言（ドメスティック）でありまして、まず日本におけるその法律の基礎を理解した上で比較法としての英語（英米法・EU法）となるので、1年次の英語授業ではなく、それぞれの法学担当の先生がご自身の専門講義で英語・英文（例、米国における当該制度や用語）を紹介する方が効率的かもしれませんね。小生は、用語や条文だけですが、そう心がけるようにしています。余談ですが、米国では、陪審員制度とか、刑事判決における有罪（guilty）と無罪（not guilty）の本質的な違いなどを小学校段階できちんと教えているそうです。一方、ニュース英語やビジネス英語は、使用法のクセなどもありますので、「さわり」程度でも英語授業で紹介があるといいと思います（対象は中・上級者以上?）。
- 正確な読解力と思考力を身につけさせることが肝要。この両者が身につけば、簡単な会話力は、それを必要とする機会と環境が揃えば、比較的容易に身につく。
- 一般的には高等学校までに学ぶ文法の再確認と、読解力・語彙を重視した教育、基礎的な作文力をつける教育が必要と思います。オーラルな表現力は学生の希望、意欲に応じて、一部の学生を対象にしてもよいのではないのでしょうか。
- 基礎的な読み書き会話する能力を徹底的に身につけることが何よりも肝要と思います。インターネットや放送新聞等のメディアから必要な情報をキャッチし、それをもとにコミュニケーションする能力が身につけていけば、日本で就業する上でさしあたり問題ないはず。

## 法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

それ以上に専門的な「法律英語」は本学の学生には無理無駄です。例えば、動詞にしても have, give, take, get, go, come など本当に基礎的なものを文法的に正確に使えるようになれば、それでさしあたりのコミュニケーションは成り立つはずで、たとえて言えば、一人外国で一ヶ月暮らせるだけのコミュニケーション能力を身につければ本学学生として十分だと思います。それで自信がつけば、卒業後実地でさらに実力をつけてゆけるでしょう。

- 現在、英語が果たしている役割、必要性が実感でき、入口では、さほど困難でなく勉強の効果を実感できるようなプログラムを各学生の到達度に合わせて提供していただくといったことがあるかというように思うのですが、可能であればですが。
- 先ずは、学生の就職先の業種から、英語力がどの程度必要かを分析して見たらどうかと思う。また、学生がどのような業種に就職を希望しているのかのアンケートをとり、必要とされる英語力をつけるためのカリキュラムを検討したらどうかとも思う。現状では、現代法学系の学生は、中小企業への就職がほとんどで、英語力を必要としている企業へはあまり就職していないと思います。

以上のことから法学系の教員は英語教育に対して様々な意見をもっていることがわかるが、概して法律に関する英語を学ぶよりも英語の基礎力、特に、読み書きの能力を高めることを強調している意見が多いといえるであろう。

## 6. 考察

本節では上記の結果をもとに先に設定したリサーチ・クエスチョンに即しながら論じていく。

**リサーチ・クエスチョン1：法学系の学生はどのような英語学習のスタイルや好みを持っているだろうか。**

表1に示した $\chi^2$ 検定の結果から、「あてはまる」が有意に多かった項目は以下の9項目であった。

- 項目2「授業中、ひとりで（ペアやグループではなく）学習すると学習がはかどる」
- 項目4「授業が教科書にきちんとそっているとよく学習できる」
- 項目6「先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる」
- 項目7「先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい」
- 項目10「翻訳の練習はためになる」
- 項目11「言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる」
- 項目12「DVDなど映像を使って勉強するのが好きだ」
- 項目16「英語の授業の単位を落としてしまうか心配である」
- 項目17「可能な限り、よい成績をとることは重要だ」

一方、「あてはまらない」が有意に多かった項目は以下の2項目であった。

- 項目3「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」
- 項目15「他の学習者・学生と英語で話すのが好きだ」

以上の結果から、本研究参加者の学習スタイルおよび好みを以下のように推測することができる。

1. カレイラ（2016）と同様に、本研究に参加した学生は一人で学習すると学習がはかどると思っており、さらに、他の学生と英語で話すことを好まない学生が多いことが明らかになった。Young（1990）および北条（1992）は授業中皆の前で学習中の言語を話すという活動において学生が強い不安を感じることを明らかにしているが、不安を感じるから他の学生と話したくないと感じるのであろう。ゆえに、英語の授業においてはゲームなどを取り入れて自然に楽しく英語を話さなければならない状況を作り出していくなど、教員は学生が授業中に不安を感じず、安心して抵抗なく英語を話せる環境を提供していくべきであろう。
2. 本研究に参加した多くの学生は教員が教科書にそって授業を行い、誤りなどがあれば正しく直してくれ、翻訳の練習はためになると考えており、言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になり、さらに、日本語で説明してくれるとよく学習できると感じていることが明らかになった。これらは多少の相違点は見られるが、鈴木・熊澤（2006）、カレイラ（2009, 2016）、および加茂・藤原（2013）とほぼ同様の結果であり、高校までに受けてきた英語の授業がコミュニカティブなものではなく、いわゆる伝統的な英語の授業を受けてきたためにこのような授業形態を好む傾向があるといえるであろう（加茂・藤原, 2013）。
3. カレイラ（2009, 2016）および加茂・藤原（2013）と同様に、本研究においても教員が厳しく授業を行い、宿題を出すことを嫌う学生が多かった。これは「『授業としての英語』または『単位としての英語』の授業のため、授業時間外では英語学習の必要性を感じておらず、先生が優しく宿題もない楽な授業の方がいいと考える傾向がある」（加茂・藤原, 2013, p. 89）ためであろうと推測できる。
4. ビデオやDVDなどを使った学習方法を好む学生が多かったと報告しているカレイラ（2009, 2016）と同様に、本研究に参加した学生はDVDなどの映像を使って勉強する方法を好む傾向があった。一方で、カレイラ（2016）が対象とした経済・経営学部の学生と比較すると、本研究に参加した法学系の学生はコンピュータやインターネットを使って英語を学習することに対して関心が低かった。

**リサーチ・クエスチョン2：法学系の学生はどのような英語の能力を身につけたいと思っているだろうか。**

## 法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

表2に示した $\chi^2$ 検定の結果から「あてはまる」が有意に多かった項目は以下の9項目であった。

- 項目18「聞く力をもっと身につけたい」
- 項目19「話す力をもっと身につけたい」
- 項目20「読む力をもっと身につけたい」
- 項目21「書く力をもっと身につけたい」
- 項目22「文法力をもっと高めたい」
- 項目23「発音をもっと上手になりたい」
- 項目24「語彙力をもっと高めたい」
- 項目25「英和翻訳がもっと出来るようになりたい」
- 項目26「和英翻訳がもっと出来るようになりたい」

経済・経営学部の学生を対象に調査を行ったカレイラ（2016）と同様に、本研究に参加した法学系の学生は積極的に様々な英語力を身につけたいと思っていることがわかる。

**リサーチ・クエスチョン3：法学系の学生はどのような英語の授業を受講したいと思っているだろうか。また、それらは英語教員や法学系の教員の意見とどのような類似点・相違点があるであろうか。**

「あてはまる」が有意に多かった項目は以下の5項目であった。

- 項目31「ビジネス英語を学ぶ授業」
- 項目36「TOEICに関する授業」
- 項目37「英文法を学び直す授業」
- 項目38「英米の映画を使った授業を受けたい」
- 項目39「英語でコミュニケーションを行う授業」

「あてはまらない」が有意に多かった項目は以下の3項目であった。

- 項目33「英語でのインタビュー（面接）の受け答えを学ぶ授業」
- 項目34「海外の学生との交流プロジェクトに参加したい」
- 項目35「海外の企業でのインターンシップに参加したい」

これらの結果から以下のことを示唆できるであろう。

1. 本研究に参加した学生の多くがビジネス英語を学ぶ授業を受けたいと思っていることが明らかになった。しかし、経済・経営学部の学生を対象に調査を行ったカレイラ（2016）では英語での電子メールの書き方、英語でのプレゼンテーションの仕方、および英語での電話の対応の仕方などにも興味がある学生が多かったが、本研究に参加した学生は漠然とビジネスに関する英語の授業を受けたいと思っているだけであり、そのような個別のスキルにはあまり関心がなかった。また、カレイラでは自由記述式の回答に

ビジネス英語に関する記述がいくつか見られたが、本研究に参加した学生はビジネス英語に関することは誰も記述していなかった。以上のことから本研究に参加した法学系の学生はビジネス英語を学ぶ授業を受けたいと考えている学生は多いが、経済・経営学部の学生と比較すると、個別のスキルにはあまり興味がなく、漠然とビジネス英語に興味を持っている学生が多いといえるであろう。

2. 専門科目を英語で学ぶことが必要であると多くの学生が認識していた吉重（2005）、中野（2005）、藤原（2011）、および永野（2007）とは異なり、本研究に参加した法学系の学生の多くは法律に関する英語にあまり関心がないことが明らかになった。法学系の教員の記述にも見られたように「国際的にみて、一部の分野を除き、法律は極めて方言（ドメスティック）」であり、日本語においても専門用語や難解な表現が多く、理解するのが難しい。ゆえに、本研究に参加した学生はそのような難しい内容のものを英語で学ぶことを好まないのであろう。また、卒業後に多くの学生は法律関係ではなく、商社や銀行などの一般企業に就職するため、卒業後に法律関係の英語があまり必要ではないと感じているのではないかと思われる。

さらに、英語教員においては法律関係に関する記載は見られず、法学系の教員においては、1名が「法律関係の英語に関する記載は、時間的にも1年次の『英語授業』に盛り込むのは難しいかもしれません。国際的にみて、一部の分野を除き、法律は極めて方言？（ドメスティック）でありまして、まず日本におけるその法律の基礎を理解した上で比較法としての英語（英米法・EU法）となるので、1年次の英語授業ではなく、それぞれの法学担当の先生がご自身の専門講義で英語・英文（例、米国における当該制度や用語）を紹介する方が効率的かもしれませんね」などのように法学専門の教員が各自の専門の講義で英語を教えることには賛成であるという意見が見られたが、もう1名は「専門的な『法律英語』は本学の学生には無理無駄です」と記載しており、学生・英語教員・法学系の教員とともに法学関係の英語の授業をあまり希望していないといえるであろう。

3. 保育士養成課程や経済・経営学部の学生のニーズを調査したカレイラ（2009, 2016）や食物栄養学科、理学療法学科、作業療法学科、保育学科におけるニーズを調べた藤原（2011）、および経済学部のニーズ分析を行った早坂（1995）と同様に本研究に参加した学生は英米の映画を使った授業を受けたいと思っている学生が多いことが明らかになった。また、自由記述式の回答においても映画を使った授業を望む意見が記載されていた。さらに、リサーチ・クエスチョン1においても明らかになったように、本研究に参加した学生の多くはDVDなどの映像を使って勉強する方法を好む傾向があったことから、大学の英語の授業にどのように映画などの映像を取り入れ、教育効果をあげていくことができるかを検討していくべきであろう（カレイラ, 2016）。

4. 項目 39「英語でコミュニケーションを行う授業」において「あてはまる」を選択した学生が有意に多く、さらに、自由記述式の回答にも「コミュニケーションが多い授業」「外国人と交流したい」などコミュニケーションに関する記述が多く見られたことから、本研究に参加した学生は実際に外国人などとコミュニケーションができるようになる英語を学び、英語を話せるようになりたいと思っていることがわかる。これらは吉重(2005)、中野(2005)、早坂(1995)、およびカレイラ(2016a, 2016b)と同様の結果であり、学部にかかわらず大学生が最も受講したい授業は英語でコミュニケーションを行う授業であるといえるだろう。一方で、カレイラ(2016)と同様にリサーチ・クエスチョン1においては他の学生と英語で話すことを嫌がる学生が多かった。つまり、英語でコミュニケーションを行う授業を受け、英語でコミュニケーションができるようになりたいという希望は持っているが、実際に学生同士で英語を話すことには抵抗があるというある種の矛盾が見られる。

また、法学系の教員はコミュニケーション能力よりも英語の読み書きの能力を高めることが必要であると述べており、これは学生と教員間におけるニーズのずれを指摘した永野(2007)と同様の結果になった。

5. カレイラ(2016)と同様に本研究に参加した学生の多くは英文法を学び直す授業を受けたいと思っていることが明らかになった。学生の自由記述式の回答にも少数ながら「英文法をもっと向上させたい」「文法をもういちど復習して身に付ける授業」などという記載が見られ、さらに、「自分のレベルにあった授業」「英語がすごく苦手なのでついていけるくらいのスピードで授業をしてほしいのと、難しすぎるとさらに混乱してしまうので少し簡単な問題を少しずつやりたい」などとも記載されていた。さらに、英語教員の中には「中学生レベルの文法から教えるべきである(量をとにかく増やす)」「上級クラスの学生には専攻分野に関する英語や、英字新聞、インターネット、映像などを用いた英語学習を行うことは良いと思いますが、中級クラス、下級クラスの学生には基本的な英文法から学習しなおす必要があると思います」などのように英文法に関する記述がいくつか見られた。さらに、法学系の教員の自由記述式の回答においても「高校時代の英語を学び直すところから始める必要があると思います」「一般的には高等学校までに学ぶ文法の再確認と、読解力・語彙を重視した教育、基礎的な作文力をつける教育が必要だと思います」などのように英文法に関する記載がいくつか見られた。

一方で、「楽しい授業」「英語に対して苦手意識をもたず、英語が楽しくなるような楽しく英語が身につく授業」「ゲーム感覚で出来る授業」「わくわくするような英語教育」などのように「楽しい」という記述が学生の自由記述式の回答に多く見られたことから、彼らは文法などの英語の基礎が足りないということは理解しており、基礎から学びたいとは思っているが、中学校や高等学校で行われたような教え方ではなく、楽しく学ば

いていることが推測できる。ゆえに、学生のレベルにあわせた英文法を学び直す授業というものを提供すべきであるが、学生が毎回の授業を待ち遠しくなるような「楽しい」「わくわくする」ような工夫を教員側も行っていく必要があるであろう。

6. 本研究に参加した学生の多くが TOEIC の点数をあげたいと思っており、さらに、自由記述式の回答にも TOEIC に関する記述がいくつか見られた。これらのことから本研究に参加した学生は TOEIC に対する関心は高いといえるであろう。

## 7. おわりに

本研究では法学系の学生の英語学習に対するニーズ分析を行い、彼らが大学の英語の授業に対してどのような態度や願望を持って英語を学習しているのかを調査し、さらに、英語教員および法学系の教員にも自由記述式の質問紙調査を行い、英語の熟達度の低い学生が多い法学系の学部においてどのような英語の授業を行っていくべきかの調査を行った。その結果、カレイラ (2009, 2016)、加茂・藤原 (2013)、および鈴木・熊澤 (2006) と同様に多くの学生は日本語での説明を望んでおり、カレイラ (2009, 2016) と同様にビデオや DVD などを使った学習方法を好み、さらに、カレイラ (2009, 2016)、藤原 (2011)、および早坂 (1995) と同様に英米の映画を使った授業を受けたいと思っている学生が多いことが明らかになった。また、文法に関しては学生および教員ともに学び直したい、学ぶべきだと思っており、一致した意見が見られたが、コミュニケーションを重視した楽しい授業を受けたいと思っている学生が多い一方で、教員にはそのような意見はあまり見られなかった。さらに、専門分野を英語で学びたいという学生が多かった経済、医療、理工系などの学部とは異なり、法律関係のことを英語で学びたいという学生はかなり少なく、英語教員も法学系の教員も英語で法学などの専門を学ぶことには消極的な意見が多かった。以上のことから英語の熟達度が低い学生が多い法学系の学部の英語の授業では、いわゆる法律を英語で学ぶような授業を積極的に取り入れる必要はなく、英語でのコミュニケーション活動や英文法に関する授業などを必修の授業などで行い、ビジネスに関する英語や TOEIC などを選択の授業で提供し、さらに、必要に応じて映画や DVD などのメディアを活用しながら、学生が楽しいと思えるような授業を行うべきであると提案できるであろう。

## 謝 辞

本研究にご協力・ご参加いただいた東京経済大学の英語の先生方、現代法学部の先生方、また、現代法学部の学生の皆様に心から感謝申し上げます。なお、本稿は統計数理研究所共同研究レポート 344「大学生を対象にした英語学習に対するニーズ分析」の一部を加筆・修正したものです。

引用文献

- Brown, J.D. (1994). *Elements of Language Curriculum*. Boston: Heinle & Heinle.
- カレイラ松崎順子 (2009). 「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する調査—English for Specific Purposes (ESP) の視点から—」 *JALT Journal*, 31, 65-86.
- カレイラ松崎順子 (2015). 「社会科学系の大学生, 教員, および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析」『人文自然科学論集』136, 45-61.
- カレイラ松崎順子 (2016a). 「経済・経営学部の英語の習熟度の低い大学生を対象にした英語学習に対するニーズ」 *Language Education & Technology*, 52, 179-203.
- カレイラ松崎順子 (2016b). 「社会科学系の大学生を対象にした英語学習に対する意識調査」『人文自然科学論集 138 号』17-33.
- Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration and processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 藤原まみ (2011). 「食物栄養学科・理学療法学科・作業療法学科・保育学科におけるキャリア教育としての英語教育: 学生の実態とニーズ分析」『九州栄養福祉大学研究紀要』8, 195-233.
- 深山晶子 (編) (2000). 『ESP の理論と実践』東京: 三修社.
- 早坂慶子 (1995). 「北海道における大学英語教育のニーズ分析—北星学園大学の場合—」, 『北星学園大学文学部北星論集』32, 67-91, 204-205.
- 加茂葉子・藤原愛 (2013). 「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する追跡調査: ESP (English for Specific Purposes) アプローチの視点から」『育英短期大学研究紀要』30, 81-94
- Kikuchi, K. (2005). Student and teacher perceptions of learning needs: A cross analysis, *Shiken JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*, 9, 8-20.
- Mori, S. & Tanabe, Y. (2011). Students' course evaluations and their roles in faculty development (2): Analyses of students' perceptions toward required English classes, *Kinki University English Journal* (7), 17-36.
- 永野喜子 (2007). 「日本のコメディカル養成過程における英語教育—アンケート調査結果: 見られる医療現場のニーズと学生の意識との差」『ESP の研究と実践』第6号, 57-66.
- 中野秀子 (2005). ニーズ分析と教材開発」『ESP の研究と実践』4, 51-60.
- Richards, J. C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 清水裕子・小山由紀江 (2001). 「工学系大学卒業生の英語ニーズ分析」『立命館経済学』50, 388-405.
- 鈴木栄・熊澤孝昭 (2006). 「日本人高校生の英語教育に対するピラーモデルの構築」 *Step Bulletin*, 18, 215-223.
- 鈴木由美 (2007). 「過去2年間にみる医学英語に対する助産師学生のニーズ」『桐生短期大学紀要』第18号, 137-140.
- 吉重美紀 (2005). 「大学の共通教育に学生が求める英語力—工学部, 水産学部, 医学部1, 2年生のニーズ分析から—」『ESP の研究と実践』4, 111-121.
- 寺内一 (2005). 『ビジネス系大学の英語教育イノベーション—ESP の視点から』東京: 白桃書房.

付録1 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の質問項目

1. 他の学習者とペアを組んだり, 3—4人のグループで勉強するのが好きだ
2. 授業中, ひとりで(ペアやグループではなく)学習すると学習がはかどる
3. 先生が厳しく授業をしてくれるとよい
4. 授業が教科書にきちんとそっているとよく学習できる
5. 先生がテストをしてくれたほうがよく学習できる
6. 先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる
7. 先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい
8. コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある
9. 先生が教室を歩き回り, 一人一人生徒に指導してくれるのがよい
10. 翻訳の練習はためになる
11. 言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる
12. DVDなど映像を使って勉強するのが好きだ
13. 自分のライティング(筆記の)課題をお互いに直しあうと勉強になる
14. 英語の宿題を出してくれたほうがよい
15. 他の学習者・学生と英語で話すのが好きだ
16. 英語の授業の単位を落としてしまうか心配である
17. 可能な限り, よい成績をとることは重要だ

付録2 「卒業までに身につけた英語力」の質問項目

18. 聞く力をもっと身につけたい
19. 話す力をもっと身につけたい
20. 読む力をもっと身につけたい
21. 書く力をもっと身につけたい
22. 文法力をもっと高めたい
23. 発音をもっと上手になりたい
24. 語彙力をもっと高めたい
25. 英和翻訳がもっと出来るようになりたい
26. 和英翻訳がもっと出来るようになりたい

付録3 「受講したい英語の授業」の質問項目

27. 英字新聞やニュースなど時事英語を学ぶ授業
28. 英語でインターネット上の情報を読んだり, 検索したりする授業
29. 英語での電子メールなどの書き方を学ぶ授業

法学系の学生を対象にした英語学習に対するニーズ調査

30. 英語でプレゼンテーションのやり方を学ぶ授業
31. ビジネス英語を学ぶ授業
32. 電話の応対に関する英語を学ぶ授業
33. 英語でのインタビュー（面接）の受け答えを学ぶ授業
34. 海外の学生との交流プロジェクトに参加したい
35. 海外の企業でのインターンシップに参加したい
36. TOEIC の点数を向上させたい
37. 英文法を学び直したい
38. 英米の映画を使った授業を受けたい
39. 英語でコミュニケーションを行う授業
40. 英語キャンプ（料理・スポーツなどを英語で行う）があったら参加したい。
41. 英語のネイティブスピーカーといつでも会話できるような場所があったほうがいい
42. 法学の専門的な英語表現を身につけたい
43. 法学の専門書が読めるようになりたい
44. 法学に関する英語に興味がある
45. 英米の法学関係の映画で英語を勉強したい